

第66回日米学生会議 募集要項

- 開催期間** 直前合宿:8月1日(金)~8月 2日(土)
本会議: 8月2日(土)~8月25日(月)帰国日含む
- 開催地** Des Moines(アイオワ州)・San Francisco(カリフォルニア州)・New York(ニューヨーク州)
Washington,D.C.
- 募集人数** 28名
- 応募資格** 日本国内の大学、大学院、短期大学、専門学校等に在学中の学生(留学生含む)
公式プログラム(春合宿、防衛大学校研修、直前合宿、本会議)には参加必須。
なお、公式プログラムに参加するために学校を欠席しなければならない学生には、第66回日米学生会議主催者より「日米学生会議参加証明書」を発行する。
- 選考試験** <第一次選考> 書類審査(応募フォーマットに記載された情報をもとに行う)
<第二次選考> 面接(個人・グループ)、教養試験(一部英語含む)
第一次選考試験料:2000円 第二次選考試験料:5000円
第一次選考試験合格者に対し、第二次選考試験を行う。
各種英語能力試験も参考資料の一部とする。(未受験者については第二次選考試験会場で英語能力試験の受験が可能)
詳細はホームページにて発表する。
京都選考試験:3月 6日(木)~3月 7日(金)
東京選考試験:3月16日(日)~3月19日(水)
選考結果通知:4月上旬
- 応募方法** 2014年1月11日(土)~2月21日(金)の間に、日米学生会議ウェブサイトにて公開される申し込みフォーマットに記入後、電子メールか郵送にて応募。
2014年2月21日(金)23時59分必着。
- 参加費** 25万円
本会議中の移動、宿泊、食事の費用を含む。
また、春合宿、直前合宿中の宿泊費、食費については全額、移動費については一部補助が行われる。
防衛大学校研修については、一部補助が行われる。
(賛助団体による支援により、参加者の個人負担は大幅に軽減されている。)

日本側参加者出身大学

*文理科系、専門、学年問わず、全国から多様な学生が参加しております。

青山学院大学	京都大学・大学院	静岡大学	津田塾大学	東京工業大学	西南学院大学	宮崎大学
大阪府立大学・大学院	京都外国語大学	首都大学東京	東海大学	同志社大学・大学院	福井大学	明治大学
岡山大学	熊本大学	上智大学	東京大学	東北福祉大学	防衛大学校	山形大学
お茶の水女子大学	慶應義塾大学	千葉大学	東京医科歯科大学	名古屋大学	法政大学	立命館大学・大学院
海上保安大学校	国際教養大学	中央大学	東京外国語大学	一橋大学・大学院	北海道大学	琉球大学
九州大学	国際基督教大学	筑波大学	東京藝術大学大学院	順天堂大学	三重大学	早稲田大学・大学院 等

お問い合わせ

日米学生会議事務局 一般財団法人国際教育振興会内
〒160-0004 東京都新宿区四谷1-21 Tel/Fax: 03-3359-0563
Email: jasc66media@gmail.com
Blog: www.jasc66blog.tumblr.com
Twitter: www.twitter.com/jasc_ecs
Facebook: 日米学生会議
Web: http://kjass.net/jasc-japan

実行委員によるブログ、TwitterやFacebookでは、説明会開催日時など最新情報を告知しております。是非ご覧下さい。ご不明な点がございましたら、ご遠慮なくお問い合わせ下さい。
また、ウェブサイトより資料請求が可能です。

一般財団法人国際教育振興会
〒160-0004 東京都新宿区四谷1-21
Tel/Fax: 03-3359-9621
Email: info@iec-nichibei.or.jp
Web: www.iec-nichibei.or.jp
日米会話学院、日本語研修所の運営の他、外国人による日本語弁論大会、米国大学日本研修プログラム等を実施しています。

Japan-America Student Conference JASC

第66回 日米学生会議

2014年アメリカ開催

Des Moines / San Francisco
New York / Washington, D.C.



文化の交差から創る道
~学生が受け継ぐ80年の平和への歩み~

-Communicate and Connect: Pursuing Peace at the Crossroads of Culture-

主催: 一般財団法人国際教育振興会
企画・運営: 第66回日米学生会議実行委員会
後援: (予定)外務省 文部科学省 米国大使館 日米文化センター 一般社団法人日米協会
賛助: (予定)公益財団法人三菱UFJ国際財団 公益財団法人双日国際交流財団 公益財団法人平和中島財団

Japan-America Student Conference



文化の交差から創る道

～ 学生が受け継ぐ 80 年の平和への歩み ～

-Communicate and Connect : Pursuing Peace at the Crossroads of Culture-

日米学生会議 Japan-America Student Conference (JASC)

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、1934年、4人の日本人学生が満州事変以降悪化していた日米関係を憂慮し、太平洋を渡り創設した日本初の国際的な学生交流プログラムである。創設時より学生自身の手による会議の企画、運営が行われ続け、太平洋戦争勃発に伴う会議中断をはじめ幾多の困難を乗り越えながら現在までの歴史を築き、第66回会議が開催される2014年に80周年を迎える。学生たちが世界のさまざまな問題を議論し、率直な対話で相互理解を深め、将来の平和の実現に貢献するという創設時の理念は今日まで継承されている。

参加者は 7つの分科会のいずれか1つに属し、日本側では5月から夏の本会議に向けて事前準備活動が行われる。本会議は毎年8月、日米両国交互に開催され、日米それぞれ36人、合計72人の学生が4週間にわたり複数の都市を訪れながら共同生活を行う。分科会におけるディスカッション、施設や企業、専門家を訪れ見識を深めるフィールドトリップ、参加者の興味に応じて自由に議題を設定し意見交換するスペシャルピック、会議中感じたことを全員で共有するリフレクション、各訪問都市でその地域に関連する問題を取り上げるフォーラムの開催などを通して、4週間、共に考え抜く。



日本側実行委員長
小松崎 遥平

日本側実行委員長からのご挨拶

日米学生会議は、新たな発見に満ちた一夏である。

ここでは官僚のように、精緻なデータ分析や実現可能な政策提言をすることは難しい。メーカーのように、目に見える形で製品を提供するわけでもない。社会に出て仕事をすることがない学生が、国際問題を議論する様子を見て、人々は冷めた声で言うかもしれない。学生ができることなどたかが知れている、と。

80年前の学生も同じことを言われた。満州事変以降急速に悪化していく日米関係の渦中であって、何の後ろ盾もお墨付きもなく、ただ平和を希求する4名の日本人学生が太平洋を渡り、アメリカ人学生や教授を説得する。誰の目にも無謀な挑戦に映ったに違いない。しかし彼らの熱意と勇気ある訴えは、国籍も政情も関係なく、やがてアメリカ人の心に届いた。そして遂に、第1回日米学生会議は開かれた。今日まで続く伝統ある学生交流プログラムの船出である。彼らは学生だからこそバイタリティに溢れ、自らも世界平和の一翼を担うべきであるという強烈な当事者意識を抱いていた。

今日、世界地図を広げれば、そこには幾多の問題が浮かび上がってくる。北朝鮮がミサイル打ち上げを繰り返す、中国が経済を急成長させ、軍備を拡大させる一方、アメリカは世界の警察としての存在感を薄めつつあり、日本を取り巻く安全保障環境は刻々と変化している。異常気象が続く中、先進国と途上国の間では、温室効果ガス排出量削減をめぐる思惑が交錯する。歴史は過去の出来事であるが、それをどのように評価するかは、しばしば国家間の政治的争点となり、原爆投下、靖国参拝、従軍慰安婦をめぐる議論は、そうした歴史認識問題の最たる例である。2011年の大震災による福島原子力発電所の事故では、科学の絶対神話が崩れ、その限界と危険性が浮き彫りになった。移民や外国人労働者の受け入れは、労働力需給ギャップを徐々に解消していく一方で、治安の悪化や地域社会との軋轢を招くと懸念されている。世界の人々を魅了した宮崎駿作品に日本人の自然観や宗教観が通底しているように、絵画や音楽、建築などの芸術には、表現者の思想や感性など、その背後にある文化的アイデンティティが投影されている。2001年の同時多発テロの映像に映し出されたあの飛行機とビルは、衝突しあう正義の象徴であった。私たちは現代社会のこうした事象に自らその当事者として向き合い、自分が取るべき行動を考え、実行していく必要がある。それこそが80年前の学生が志したことであり、今日にも通ずる日米学生会議に課せられた使命ではないか。

「文化の交差から創る道」。参加する学生たちの人格、思考、習慣といった文化が、日米学生会議という場で交差する。そこでは絶え間なく議論をする中で、絶え間なく衝突と理解を繰り返す。「学生が受け継ぐ80年の平和への歩み」。積み重なる衝突と理解の先に創られていく道は、平和への道である。たしかに今回の会議に参加するだけでは日米を、太平洋を、世界を変えることはできないかもしれない。しかし、人ひとりの人生をも変えてしまうような経験に恵まれる参加者がそれぞれの道を歩み続け、やがて日本と世界の発展に寄与してくことで、究極的には世界平和の構築に貢献する。私は、それこそが日米学生会議の本質であると考えている。参加者は日米学生会議の主演であり、世界中で起こる様々な問題の当事者でもある。そのめまぐるしい一夏は、自分の中に、世界の中に、きっと新たな発見をもたらすであろう。

アメリカ側実行委員長からのご挨拶

In this globalized era, cooperation among international powers in the pursuit of peace is becoming ever more important. Issues such as North Korea's nuclear development, China's vast economic and military advancement, and territorial disputes require policy attention. The continued deterioration of the environment through greenhouse gas emissions, deforestation, and nuclear radiation among others calls for close collaboration. While the advancement of technology has augmented efficiency in various aspect of our lives, it has also challenged the traditional human experience. Furthermore, the increasing movement of people across borders raises questions not only about a country's immigration policy, but also the people's identity. Art, education, and the moral codes of a country help define its citizens. Yet what happens when different cultures clash?

The Japan-America Student Conference aims to provide a platform in which students from both countries can come together for one month to discuss these pressing world affairs and to foster life-long friendships that anchor their countries' alliance. Personally, coming to JASC was one of the best decisions I had made in my life thus far. JASC has taught me the importance of open dialogue despite differences and the danger of generalizing a group of people. By actively discussing with other delegates these problems that were bigger than ourselves, we learned to think critically, debate constructively, and act accordingly, all for a peaceful future together.

I welcome you to embark on this life-changing journey with us in the 66th JASC.



アメリカ側実行委員長
Xiangze Anna Zeng

第66回 日米学生会議 実行委員会 Executive Committee of 66th JASC

小松崎 遥平(実行委員長) 慶應義塾大学 法学部	Xiang Anna Zeng(実行委員長) Johns Hopkins University
木村 優吾(副実行委員長) 早稲田大学 政治経済学部	Pramodh Ganapathy(副実行委員長) Duke University
大西 由起 同志社大学 スポーツ健康科学部	Bao-Quyen Nguyen Smith College
大沼 雄貴 東海大学 教養学部	Norihito Naka Tufts University
兼子 莉李那 上智大学 国際教養学部	Ayaka Yoshida Northwestern University
関口 響 法政大学 経営学部	Robert (Ken) Panis Villanova University
古村 大和 国際教養大学 国際教養学部	Jee Eun (Sarah) Choi Haverford College
鈴木 健司 立命館大学 法学部	Sharon Lu Univ. of Wisconsin -- Madison



本会議までの流れ(予定)

4月	5月	6月	7月	8月
参加者決定	春合宿	自主研修 防衛大学校研修	事前活動	直前合宿 本会議
春合宿: 防衛大学校研修(予定):	全参加者が初めて顔を合わせる場となる。 防衛大学校に1日訪問する。教授の講義を受けたり、校内を見学するほか、防衛大学校生とディスカッションやレセプションを通して交流する。			
自主研修:	有志の参加者で国内の都市を訪れ、現代社会が抱える問題を直接考える。本年度は東北地方への訪問を予定しており、震災復興や日本文化について考えを深める。			
直前合宿:	日本側参加者が集まり、本会議に向けて最終準備を行う。			

本会議中の活動

- ・分科会**
日米の参加者は7つの分科会のいずれかに所属する。各分科会ではそれぞれのテーマに沿って1ヵ月間議論を行う。
- ・フィールドトリップ**
全体あるいは分科会のテーマに即して、施設や企業史跡を訪れ、見識を深める。
- ・スペシャルトピック**
参加者が各自の興味に応じて自由に議題を設定し、意見交換や議論を行う。
- ・フォーラム**
各開催地で、その地域に関連する問題や日米両国に深く関わるトピックを取り上げ、講師を招いて一般公開のフォーラムを開催する。
- ・ファイナルフォーラム**
最終開催地であるワシントンD.C.にて、分科会の活動報告と本会議中に行ってきた議論の成果を社会に発信する。

分科会

日米学生会議の全ての参加者は、7つの分科会(Round Tables)のうちのいずれか1つに所属する。各分科会のピックに沿い、5月~7月までの事前準備活動を行うと共に、本会議においてもフィールドトリップやディスカッションを通じて共に考え抜いていく。

現代における歴史教育とその社会的影響

歴史教育は国民の帰属意識、愛国心を育む。歴史教育によって培われた歴史認識の差異が、朝鮮従軍慰安婦問題や尖閣諸島問題など国家間、民族間対立を生み出している。日米両国は太平洋戦争にそれぞれ異なった評価をしているが、真珠湾攻撃、戦時中の日系アメリカ人強制収容所や原爆投下、そして極東国際軍事裁判などの過去に起きた事実をどのように捉え、国民に教育すべきなのか。アメリカではヒスパニック、ネイティブアメリカンなど多くのエスニシティや移民が混在する中、どのような視座で公平な歴史教育を行うかが議論されている。当分科会では、グローバル化が進み、民族や文化が複雑に交差する現代社会において、歴史とは何かを再考察し、すべての国家や民族にとって公平な歴史教育を実現することが困難な中、歴史上の事実をどのように教育すべきなのかを模索する。

日米関係におけるスマートパワー

世界のパワーバランスは急激に変化している。アジア太平洋地域では、中国の軍事的台頭と海洋進出により、南シナ海における領有権問題や尖閣諸島問題などの対立が顕在化し、政治的緊張が高まっている。こうした中、自国の文化や価値観、政策の魅力などで他国を味方につけ、自らが望む結果を獲得できる「ソフトパワー」が注目されている。しかし軍事力や経済力などの強制力を持つ「ハードパワー」も依然として無視できない。従って現実の国際社会では、ソフトパワーの限界を認識しつつも、両者を巧みに組み合わせた「スマートパワー」の活用が有効である。即ち相手から信頼や共感が得られるソフトと圧力をかけるハードの双方を、戦略的にバランスを取りながら行使することが重要となる。当分科会では、アジア太平洋地域の平和と安定のために、両国がどのようにスマートパワーを活用して日米安全保障体制の強化をはかるのか、そして経済連携や文化交流を推進していくのかを考察する。

環境問題における国家、企業、市民の役割

現代社会には様々な環境問題が存在する。1997年に京都議定書が採択され、各国は温暖化防止に取り組んできた。日本では近年、環境に優しい車や家電製品が開発され、政府は減税や補助金によってそれを推奨した。街中では廃棄時に有害となるレジ袋の使用を削減するためエコバッグ利用者に特典を設ける店も増えている。このように市民は政府や企業の取組に誘発され、エコ活動に取り組むようになった。しかし温暖化の進行を抑制できないまま事態は深刻さを増し、頻発する異常気象は各地に被害をもたらす、海面上昇により水没が予想される国や地域もある。温暖化を防止するためには、これまでの国際的枠組みの水準を見直し新たな数値目標を導入するなど、政府、企業、市民が一丸となってより効果的な対策を講じる必要がある。当分科会では温暖化に限らず自然破壊や放射能汚染などの諸問題も考察し、これらの問題を解決するため、日米両国の政府、企業、市民がどのような役割を果たすべきかを模索する。

アイオワ州の州都デモインは、大統領選挙において党員集会所が全米で最初に開かれる都市であり、数々の歴史的演説を見届けてきた。オバマ大統領が"CHANGE"という言葉掲げてこの地の予備選に圧勝したことも記憶に新しい。金融、保険の街としても知られ、有名保険会社の本社が立ち並ぶ一方、郊外に出れば巨大なトウモロコシ畑が広がっている。かつては先住民が居住し、その後ヨーロッパからの入植者が炭鉱開発や鉄道敷設を進めたが、製造業の衰退に伴い、今日では第三次産業を中心とした地域経済へと移行した。都市美運動によって建てられたボザール様式と呼ばれるヨーロッパ風の建築も目を引く。こうした政治、産業、歴史、文化の諸相は、他の地方都市にも共通して見られ、この地はアメリカの典型的な地域コミュニティであると言える。



第1開催地
Des Moines
(アイオワ州)



第3開催地
New York
(ニューヨーク州)



第2開催地
San Francisco
(カリフォルニア州)

米国西海岸の心臓部とも言えるサンフランシスコは国際都市の一つであり、世界中の産業と文化が集積している。南に位置するシリコンバレーではGoogle、Apple、FacebookなどのIT企業をはじめ、バイオ、医療分野の企業も台頭し、そこでは新たな技術や発想で起業家としての道を削って、熾烈な企業間競争を繰り広げている。一方この地は多くのアジア系移民を受け入れてきたが、排日移民法や中国人排斥法などが制定され、少数派排除の時代もあった。今日ではジャパントウンやチャイナタウンなどの移民街が形成されているほか、ヒスパニック系移民の居住区もあり、多様な民族が混在している。LGBTの中心地としても知られ、街にはその象徴となるレインボーフラッグがはたためくなど多様な文化や価値観が交差している都市でもある。



第4開催地
Washington, D.C.



ニューヨークは、ブロードウェイ、自由の女神、エンパイア・ステート・ビルなど多くのランドマークがひしめくアメリカ最大の都市であるが、この地はいつも激動の歴史の渦中にあった。アメリカ経済の成長とともに発達した国際金融の中心地ウォール街は、世界恐慌やリーマンショックなど歴史的経済危機の舞台にもなった。2001年に起きた同時多発テロの恐怖は未だ完全に拭かれてはならず、ワールドトレードセンターの跡地はヒロシマ・ナガサキの爆心地と同様に「グラウンド・ゼロ」と呼ばれている。東日本大震災翌年の2012年には大型ハリケーン「サンディ」にも襲われた。テロや自然災害と対峙する中で、平和と安定そして安全を確保するために何をなすべきかを考察し、併せて世界平和の一翼を担う学生の果たすべき役割を問いたい。

アメリカの首都ワシントンD.C.には、大統領府をはじめ、連邦議会、最高裁判所など連邦政府の諸機関のほか、IMFや世界銀行などの国際機関、各国大使館が集中しており、アメリカ国内だけではなく国際的な政治の中心となっている。全米自動車工業会のような業界団体やシンクタンクなどの組織もロビー活動や政策提言を行っている。この地では外交から金融、通商経済に至るまで、様々な政策決定が連日のように行われ、その影響力は対外的にも計り知れない。日本との関わりも深く、1912年に東京からワシントンに桜が寄贈され、それを記念して桜祭りが毎年開催されている。会議の成果を社会に発信するファイナルフォーラムも開催され、「新たな発見に満ちた一夏」はこの地ワシントンD.C.で、締めくくられる。



正義と道徳

人々の価値観は地域や文化、宗教など様々な要因によって形成され、それぞれの価値観により多様な正義が存在する。1994年にルワンダで発生した大量虐殺が、深刻な人権侵害であるとの認識は各国一致していた。しかし人道的介入とは言え、軍事力を用いて解決することの是非については見解が分かれた。1人の生命を犠牲にしても、多数の命が助かれば、その殺人は正当化されるのか。海難事故によって食料を長らく絶たれた4人は、その1人を殺害し遺体を食べ、3人が生き延びた。そのまま4人が餓死するより、3人が生き残ったことを評価する正義がある一方で、その行為を批難する正義もある。同じ事象でも、価値観が異なれば正義も異なる。これに対して、道徳は善悪を判断する規範として、誰もが共有できる普遍的な価値観たり得るのか。当分科会では、価値観を形成する諸要因を考察しながら、果たして相異なる正義が共存できるのか、道徳は普遍的に共有できるのか模索する。

芸術とアイデンティティ

古来より人類は芸術を通して自己表現を行ってきた。芸術の形態は絵画のみならず、音楽や建築、衣服や演劇、文学や映像と多岐に渡る。作品を創り上げる表現者が人である以上、作品には人々の思想や文化、宗教などが投影される。法隆寺建立の背景には当時大陸から伝わった仏教を信ずる者がおり、その宗教観は建築様式にも影響している。日本人の自然を愛する心は、織物や焼き物、屏風や絵画に花や鳥を描くことで表出され、「侘び寂び」の精神は龍安寺の庭園に枯山水を以て表現された。そして、「作品」は相互に影響し合い、また新たな「作品」を生む。アメリカの代表的な音楽であるブルースも、元を辿ると黒人霊歌と欧州から白人が持ち込んだ西洋音楽が融合する中で生まれた。当分科会では、芸術作品の背景にある文化的アイデンティティやその歴史を考察し、「芸術」と「人間」の関係を多角的な見地から再考することにより、芸術の社会的役割とその価値がいかなるものかを模索する。

移民の功罪と展望

現在世界各地には約2億人以上もの人々が移民として居住している。日本は明治以降、米国や南米諸国へ移民を送り出してきた。しかし今日では少子高齢化に伴い生産労働人口が減少し、移民受入れについての議論が活発化している。また移民により建国された米国は、現在でも年間およそ70万人の移民を受け入れている。しかし不法移民が1千万人以上滞在中、不法滞在者に合法化の道を開く移民改革法案の是非が問われている。移民が増加する背景には、受入れ側が単なる労働力の確保だけではなく、今や成長の原動力として高度人材を求め、また送出し側の雇用機会が不足し、就業機会を国外へ求めることなどがある。一方移民の受入れによる犯罪率増加や送出しによる優秀な人材の海外流出など負の影響もある。当分科会では、移民を受入れ側と送出し側の双方から考察し、受入れに伴う功罪を踏まえ、日米両国が今後どのように移民と向き合うべきなのか模索していく。

技術進歩と社会

人類は技術を駆使することによって利便性や効率性を高め、より良い世界を作りあげようとしてきた。インターネットはコミュニケーションにおける時間と距離の障壁を大幅に縮小させた。しかし、我々の生活に深く浸透した結果、膨大なネットワークに集まった個人情報や国家の機密情報を狙うサイバーテロが社会を脅かしている。医療技術においては、胎児の遺伝子から先天性異常を調べる出生前診断の技術の進歩により、以前に増して精度が上がり、流産の危険性も少なくなった。しかしより確かとなった障害の可能性を危惧して、胎児の人工中絶が行われる恐れがあり、再び生命倫理を問うことになった。このように、技術の進歩によって生活はより便利になったものの、同時に疑問も投げかけなければならない。技術の進歩によって人々は幸せになっているのだろうか。当分科会では、技術進歩が社会にもたらす功罪を様々な事例に基づいて検証し、技術とどう向き合うか、どのように活用するかを考察する。

過去の参加者の声

元アメリカ合衆国国務長官 ヘンリー・A・キッシンジャー 氏
1951年 日米学生会議参加者

I had had little opportunity, in this post-war period, to meet and exchange views informally with Japanese people. The Japan-America Student Conference provided that opportunity, and from it came many valuable new perspectives on Japanese culture and society. It was also at that time that my interest was awakened in Japanese artistic and aesthetic traditions, and appreciation which remains with me to this day.

元内閣総理大臣 宮澤 喜一 氏
1939、1940年 日米学生会議参加者

As one whose own first involvement in Japan-U.S. relations was under the auspices of the Japan-America Student Conference in 1939, I can tell you honestly that it was one of the formative events of my lifetime. Having stood in your shoes more than fifty years ago, I sincerely hope that you will take full advantage of your participation in the JASC.

浜田りん 青山学院大学国際政治経済学部国際政治学科 2年
2013年参加者

JASCほど濃い一か月は、もう二度と訪れない気がする。先輩JASCer達を感じるこの思いを、今、私も共有しています。それほどまでに、JASCは刺激的で特別な空間でした。私の分科会では、教育について徹底的に議論を交わしました。トピックはほとんど派生し、話が尽きることはありません。日本側の意見、アメリカ側の意見と対立するのではなく、一人ひとりの教育に対する捉え方、考え方が異なっていることに面白さを感じました。ディスカッション以外の時間も、JASCの大きな魅力です。夢や目標を堂々と語れる、真剣に耳を傾け受け止めてくれる、そんな雰囲気がとても心地よかったです。志高い仲間たちと本気で向き合う1か月、あなたもぜひ挑戦してみてください。

中村優太 西南学院大学法学部法律学科 3年
2013年参加者

日米学生会議では留学経験もなく、英語系団体に所属しておらず、まして帰国子女でもない私は言語という大きな壁に直面した。日本語では自信があったのに、たちまち英語になると言いたいことがうまく表現できず、議論に参加することが難しくなり、会議中にその壁を完全に乗り越えることはできなかった。しかし、互いの悩みを打ち明け、解決策を模索していく中で互いを尊敬しあい、感化しあい、この一か月は私を一回り二回りも大きく成長させ、会議を終わった今も私を突き動かしている。日米学生会議はあくまで一つの通過点にしか過ぎない。そして日米だけの関係にとどまらない。私たちは常に大局的な視野をもって日々挑んでいる。将来日米学生会議のOBの一員としてお会いできる日を楽しみにしている。

大野峻典 東京大学教養学部理科二類 2年
2013年参加者

日米学生会議から約二ヶ月たった今、JASCがまさに自分の人生を少しずつ変えていくのを感じています。特に自分に影響を与えている二つの観点から述べます。「人」：JASCで出逢った人、参加者Alumni含め累計200人はゆうに超えるでしょう。両国の参加者とはくだけない話から将来の夢や自分の過去の辛い経験を夜遅くまで語り合いました。JASCが終わった今もお頻りに連絡をとり、時には日常の悩みを共有しアドバイスを与え合うような親友が、両国にできました。この会議における、何にも代え難い、最高の収穫でした。「理系として」：どのように進路選択していくか、に大きく影響を及ぼしてくれました。視野を広げ、多様性に触れることは、自分の立ち位置を考えるにあたり、多いに役立ちました。

白畑春来 東京大学工学部化学システム工学科 3年
2013年参加者

大学では、午前中は教室に座って黒板に書かれた公式を写して、午後はテキスト通りに手を動かして実験、という工学部の生活をしていました。そんな私にとってJASCの活動は、他の学生と遠慮なしに意見をぶつけたい!という思いにぴったりあてはまるものでした。JASCでは文理や出身大学に関係なく、個人としてのアイデアを素直に話すことができ、自分から働きかければ働きかけるだけ、手応えのある反応を示してくれます。出会ってからまだ1年も経っていないのに、長年知り尽くした仲であるかのような錯覚を感じるほどの仲間に会える経験は今までになく、本会議で過ごした3週間は一日一日が忘れられない思い出となっています。この素敵な体験を66回JASCでぜひ経験してください。

竹内正人 東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修士 1年
2012年・2013年参加者

多種多様な専門分野から集まる会議の中で、私のバックグラウンドは他とは全く違っていた。第64回日米学生会議に参加者として参加し、私の人生は大きく変わった。当時、建築を中心に大学生活を送っていたが、外部への刺激を求め日米学生会議へ応募した。会議においては、衝突と葛藤が多かったものの、将来の方向性を定めることができ芸術分野への道へ踏み込むことができた。そして、実行委員として参加した今年度のプログラム。文系、理系出身の参加者の中で芸術系出身の私にとって、この一ヶ月間で出会った人の数だけ、刺激をもらい自分の視野が少し広がったように感じる。LIFE CHANGING SUMMER。人生が変わる夏と言うと、かなり大きなことだと思われるかもしれないが日米学生会議はその実現のための機会を参加者に与えてくれる。そんな機会に出会えてとても幸せだった。

伊藤孝真 京都大学経済学部経営学科 4年
2013年参加者

人生は旅です。そして人はみな旅人です。旅は僕達にいろんな表情を見せてくれます。その表情は僕達旅人の中に、孤独、不安、安心、喜び、愛、様々な感情を引き起こします。旅人が「孤独」に陥るとき、それは「何か」を求めすぎている時です。旅人が「不安」になると、それは旅に対して「真剣」になりすぎている時です。では、旅人が「安心、喜び、愛」それらを同時に感じるのはいつでしょうか。それは旅の途中で、最高の旅仲間に出会い、彼らとこれまでの旅を語り、そしてこれからの旅を共に想像しているときではないでしょうか。この今年で66回目を迎える日米学生会議を通して、一人でも多くの学生が「堂々と、自分の求める旅へと出発されることを、心から願っております。

JASC NETWORK

国際社会で活躍する日米学生会議の過去の主な参加者

天野順一(元三井物産副社長)
アレン・マイナー(㈱サンブリッジ代表取締役会長兼CEO)
井伊雅子(一橋大学大学院国際・公共政策大学院教授)
猪口邦子(参議院議員)
今井義典(元NHK副会長)
内古閑宏(ヴィジヨネア社長)
國弘正雄(元参議院議員・同時通訳者)
小林薫(産業能率大学名誉教授)
高橋和夫(放送大学教授)

日米学生会議では、同世代のみならず多くの先輩や関係者と触れ合う機会を大切にしている。勉強会やフォーラム、レセプションなどを通じて、5000人を超える様々なOB・OGと交流し、アドバイスをもらえる機会を持つ。

竹村健一(評論家)
橋本徹(日本政策投資銀行社長)
広中和歌子(前参議院議員)
船瀬俊介(環境問題評論家)
榎原稔(三菱商事相談役)
三浦俊章(GLOBE編集長)
茂木健一郎(脳科学者)
八木健(ベイビュー・アセット・マネジメント代表取締役)
八城政基(元新生銀行取締役会長)

